Card Magic Magazine

No. 21 January 3, 2014 by Hideo Kato

© Hideo Kato 2014 年 1 月 3 日

カードマジック徹底研究

ウィスパリングクイーン

’ウィスパリングクイーン’とは、選ばれたカードを当てるのに、直接マジシャンが言い当てるのではなく、Qに選ばれたカードを見せて、Qからそのカードをマジシャンが教えてもらって当てる、というような現象のマジックです。ジョーカーが使われることも多く、’ウィスパリングジョーカー’と呼ばれる作品も多くあります。

このタイプのマジックで私が見つけた中でもっとも古いものは、アーサー・カーターが、雑誌″ペンタグラム″、1955 年 8 月号において、ポンサンが″Nouvel Magic Blanche Devoilee″(1853 年) の中で、つぎのようなマジックを書いていると指摘しています。

相手に1枚のカードを選ばせ、マジシャンは客から離れ、客に選んだカードを小さな仏像につぶやかせ、そのあとマジシャンが仏像に耳を当てて、いかにも仏像がつぶやいたごとく、選ばれたカードを当てるというのです。

そのトリックは、いわゆるリップリーディングと呼ばれる手法を用いるものです。唇の動きで判断するというのです。ポンサンは、彼がこのマジックを考案したとは述べておらず、このマジックはそれより以前にあったものと推定されます。

リップリーディングという手法は、ジーン・ヒューガードによって″エクスパートカードテクニック″(1940 年) に書かれるまで、80 年近く忘れられていたとのことです。

その他の手法で行われるもので、私が見つけた中でいちばん古いやり方は、″Card Magic Library″ 第 1 巻 156 ページに収録した、ハリー・ケラーの’ウイスパリングクイーン’で、それは雑誌″リンキングリング″、1933 年 11 月号に掲載されたものです。

ケラーのやり方は、表向きのQの下に 1 枚のカードをくっつけておき、相手がカットしたところに 2 枚を入れて、Qの隣りのカードを当てるというものです。

しかしながらもっと古いものがありました。雑誌″リンキングリング″、1996 年 4 月号で、マックス・メイヴェンが、彼の知る範囲でもっとも古いウィスパリングカードのトリックは、1920 年年発行の、デラロウレンス著、″モダンカードイフェクツ″の中の、フランク・スターリングの’アイオブザジョーカー’だと指摘しています。つぎのようなトリックです。

サイ・ステビンスなど、1 枚のカードを見るとつぎのカードがわかるようにスタックされたデックを使

います。何人かの客にカードを抜かせ、表を見ずにポケットに隠させます。マジシャンは抜かれたところからカットして、ボトムカードをグリンプスすれば、隠されたカードがわかります。

そのあとジョーカーをそれぞれの客のポケットに当てて、「赤いカードと言っています。数は7のようです。ハートの7ですね」などと当てていきます。

雑誌〝スフィンクス〟、1922 年 7 月号にもアントニオ・マルカントニオが’ウィスパリングジョーカー’というタイトルで、選ばれたカードではなく、客がディールした枚数を当てるのに、Qにささやかせて当てるという演出を使っていたことが書かれています。

ポンサンが書いたリップリーディングを使うものは、〝ささやく〟ということが演出だけでなく、原理、手法において使われていましたが、前述したその他のものは、演出として使われているものです。

しかしながら、演出に使われているということをよく考えてみると、たんにマジシャンがストレートに当てるというやり方と比較したとき、マジシャンをそのマジックの主人公をとして扱うのではなく、Qやジョーカーを主役にするということにおいて、それなりの味わいが醸し出せるということがわかります。

そのあと現れる作品には、演出として用いながら、その演出が手法をカモフラージュするような働きのものも登場してきます。

サガシャスジョーカー

= ウォルター・ギブソン、〝エンサイクロペディアオブカードトリックス〟、1937 年 =

雑誌〝リンキングリング〟、1971 年 7 月号によると、以下のギブソンのトリックは、1920 年代にギブソンが’アストラルエーセズ’として発表されたもので、エンサイクロペディアに収録されたとき、’サガシャスジョーカー’と名前が変えられたそうです。

＊方　法　1＊

ジョーカーの入っているデックを使います。ジョーカーを探し、ジョーカーをリバースしてデックの中に入れます。「これから起こることがジョーカーによく見えるように、逆向きにしておきます」と説明します。

1 人目の客にデックを渡し、1 枚のカードを抜いて表を見ずに胸ポケットに入れさせます。あと 3 人の客に同じことを行わせます。

そのあとデックを受け取って裏向きに広げ、表向きのジョーカーを見つけ、それがトップにくるように

カットします。ダブルリフトでジョーカーとその下のカードを取り、2 枚を 1 枚のように持ちます。

ジョーカーの表をまっすぐ観客の方に向けて持ちながら、1 人目の客に近づきつつ、ジョーカーの陰に重なっているカードのインデックスを密かに見てしまいます。ジョーカーを 1 人目の客のポケットに触れ、いま見たカードの数をゆっくりと告げます。

マークを知るにはジョーカーをポケットの中のカードに触れる必要があると言って、ジョーカーを客のポケットに入れます。すぐにジョーカーの後ろのカードを落とし、ポケットに入っていたカードをジョーカーの後ろに重ねます。ジョーカーを外に出すとき、陰のカードがきちんとそろっているよう注意してください。そしてマークを告げます。客にポケットからカードを出してもらい、当たっていることを観客に示します。

いまジョーカーの陰にあるカードをグリンプスして、同じプロセスをあと 3 回繰り返します。つねにジョーカーをポケットに入れる前に、マークとか色を告げるようにします。

＊方　法　2＊

こちらの方法では、ポケットの中でカードをすり替えてジョーカーに重ねるという、少し不自然な行為を除外しています。

最初にデックからジョーカーを抜き出すと言ったときに、表を自分に向けてカードを広げていき、ジョーカーを見つけたらその隣りのカードを抜き出して、ジョーカーと言って裏向きにテーブルに置きます。そしてジョーカーがトップにくるようにカットします。

デックを左手に持ち、右手で抜き出したカードを取り、密かにその表を見ます。そのカードを相手のポケットに入れ、そのカードの名前を告げ、そのカードをポケットに残し、ポケットに入っていたカードを取り出します。あとの 3 人についても同じプロセスを繰り返します。最後のカードが当たったことを示しているとき、最後に手に残ったカードをデックのボトムに置き、トップのジョーカーとすり替えます。そしてジョーカーを表向きにしてテーブルに投げ出します。

＊備　考＊

ジョーカーをトップから 2 枚目にくるようにカットし、ダブルリフトしてジョーカーを見せ、上のカードをポケットに入れてすり替え、そのあとすり替えたカードをトップにのせて、ダブルリフトでジョーカーの表を見せれば、すり替えたことが目立ちません。表向きにしたジョーカーがトップにある状態で、デックを耳にあててジョーカーと会話をしてカードを当てれば、プレゼンテーションとしても面白くなります。

アナザーサガシャスジョーカー

= スチュワート・ジュダ、雑誌 ″ リンキングリング ″、1971 年 7 月 =

＊方　法＊

デックからジョーカーを抜き出しておきます。後向きになっている間に 3 人の客に 1 枚ずつ選ばせ、表を見ないでテーブルに置き、上から雑誌もしくは新聞をたたんだもので覆わせます。

前に向き直り、ジョーカーを取り上げ、それをトップチェンジでトップカードとすり替えます。そのカードをグリンプスします。そのカードを第 1 の客が置いた雑誌の下に入れて、ジョーカーに選ばれたカードを見させると説明します。雑誌の下で、選ばれたカードと手に持っているカードをすり替えます。すり替えたカードを外に出し、耳元に当ててささやきを聞く演技をします。そして雑誌の下のカードを告げて、客に名前をメモさせます。

第 2 の客のカード、第 3 の客のカードでも同様に行います。そのあと手にあるカードとデックのトップのジョーカーをトップチェンジします。

メモされた名前を読み上げさせ、雑誌をどけて、それぞれのカードが当たっていることを示します。

サガシャスジョーカー・加藤版

= 加藤英夫、2005 年 11 月 24 日 =

＊準　備＊

52 枚のダブルフェースカードを使います。一方の面がノーマルの 52 枚で、反対面がすべてジョーカーです。そのうちの 1 枚をひっくり返して、ジョーカーが上を向くようにしておきます。

＊方　法＊

デックを取り出し、ジョーカーを抜き出します。

マジシャンが雑誌を手に持ち、その下で相手に適当な 1 枚を抜いてテーブルに置かせ、その上に雑誌をのせます。すなわち、選ばれたカードがマジシャンにも相手にも見えないようにするのです。これをあと 2 枚やります。

ジョーカーを取り、1 番目の雑誌の下に入れ、すり替え、ジョーカー面を上にして出し、耳に当てて聞く演技をして、いま雑誌の下にあるカードの名前をいいます。名前をメモさせます。

あと 2 枚についても同様に行います。メモを読ませ、雑誌をどけて、すべて当たっていることを見せます。

ウィスパリングジョーカー

= ポール・カリー、雑誌 ″ フェニックス ″、1947 年 8 月 =

＊現　象＊

マジシャンは後向きになります。客がデックをシャフルしてから表向きに広げ、好きなカードを抜いてポケットに隠します。それから広がっているカードを端から順番に読み上げていきますが、ジョーカーについては、ポケットに隠されたカードの名前を言います。

そのようにしてすべてのカードが読み上げられたあと、マジシャンは後向きのままジョーカーを受け取り、ジョーカーを耳に当ててささやきを聞きます。そしてポケットに隠されているカードを当てます。

＊方　法＊

シャフルされたデックを表向きにリボンスプレッドして、「よく混ざっています」と言うとき、ジョーカーの右隣りのカードをキーカードとして記憶します。

すぐカードを閉じて相手に渡します。後向きになって、現象説明の通りに相手にやらせます。キーカードのつぎに読み上げられるカードが隠されたカードだとわかりますから、それを当てます。

身代わりジョーカー

= 加藤英夫、2012 年 9 月 28 日 =

ポール・カリーの ’ ウィスパリングジョーカー ’ のアイデアはすごく面白いのですが、3 つの問題点があります。52 枚のカードを読み上げさせる、というのに時間がかかり過ぎます。これはもっと少ないカードでやらせれば、すぐ解決します。

客に 1 組のデックを表向きに広げさせて、端から読み上げさせるということが、マジシャン以外にやらせることがたいへんです。

3 つ目の問題は致命的です。もしも客がジョーカーの手前のカードを抜いてしまったら、ジョーカーでそのカードの名前を言うことになり、そのつぎのカードが隠されたカードだと勘違いしてしまいます。それらすべての問題を解決したバリエーションです。

＊方　法＊

ジョーカーを抜き出して表向きにテーブルに置き、「あとでこのジョーカーに手伝ってもらいます」と言います。デックを裏向きに相手に渡し、よくシャフルさせます。

「全部のカードを使うと時間がかかるので、半分ぐらい持ち上げて、私にください」と言って、相手にカットさせた上半分を受け取ります。

「私が後ろを向いたら、このように好きなところから 1 枚のカードを抜いて、そのカードを見てしっかりおぼえ、そしてポケットに隠してください」と、持っているカードで手本を見せながら説明します。

手本を示すときに見たカードはキーカードとしておぼえ、持っているパケットのトップに置きます。そして後向きになります。左手は持ったパケットがつねに相手の方に見えるように位置させておきます。

相手がカードを隠したら、前に向き直ります。

右手でジョーカーを取りにいきながら、左手は持っているパケットのトップカードの下にブレークを作ります。そして取ったジョーカーを表向きにトップに置きますが、少し右にずらして置きます。

相手のパケットを指さして、「まん中あたりでカットして持ち上げてください」と指示します。相手が持ち上げたら、表向きのジョーカーを裏向きに返して、ブレークより上の 2 枚を取り、相手のカットした下半分の上にのせ、上半分をその上に重ねさせます。

「そのままではジョーカーがどのへんにあるか見当がつきますから、このように何回かカットしてください」と、持っているパケットでカットするのを見せながら指示します。

ここで後向きになります。「持っているカードを表向きにしてください。もしもいちばん上にジョーカーがあったとしたら、適当なところからカットしてください」と言います。「ところでポケットに隠したカードはおぼえていますか」と問いかけます。もしも忘れていると言ったら、ポケットのカードを確認させます。

相手に 1 枚ずつ名前を読み上げながら置いていかせます。ジョーカーのときにポケットの中のカードを言わせます。最後までやらせたら、ジョーカーを抜いて背後であなたに渡してもらいます。

前に向き直り、ジョーカーを耳に当てて聞く演技をしてから、ポケットの中のカードを当てます。

＊備　考＊

ジョーカーがない場合は、スペードのQを使います。

ウィスパリングクイーン

= エドワード・マルロー、″カーディシャン″、1953 年 =

＊方　法＊

デックを表向きに広げて、相手に 1 枚のQを抜かせ、表向きにテーブルに置かせます。そのQはたいへんおしゃべりなQなので、Qとおしゃべりするマジックを見せると言います。

相手にデックを渡し、相手にやってもらうことを説明します。「このようにカードを広げますが、あなたはカードを見ないで広げてください。そしてまん中へんのカードをこのように 1 枚ひっくり返すのです」と言って、カードの方を見ずに両手の間に広げて、まん中あたりの 1 枚を裏向きにします。

「そしてカードをそろえてください」と言って、カードをそろえます。「このようにすると、あなたも私にもわからないカードが 1 枚だけ逆向きになります」と言います。カードを広げて、裏向きのカードを表向きに戻します。デックを相手に渡して、あなたは後ろを向きます。

前に向き直ります。デックを受け取り、表向きに広げて、「間違いなくひっくり返っているでしょうね」と言いつつ、裏向きのカードを見つけたら、そのカードの下にブレークを作りつつカードを閉じます。

原著の解説では、″ここでひっくり返ったカードを、すでに解説してある方法によってグリンプスします」と書かれています。その解説を見つけようとはしましたが、どこに書かれているのか見つかりませんでしたので、推測したやり方を書きます。

デックを右方向に返して裏向きにすると、ほとんど自動的にブレークでカードがずれます。返したあとの下半分が右にずれるのです。ずれた部分を図1のように右手でつかんでカバーし、同時にずれているひっくり返っているカードをグリンプスします。すぐにカードをそろえます。実際には右手は図の位置よりも左にかけます。

デックをテーブルに置き、最初に抜き出しておいたQを取り上げます。「あなたも私もひっくり返されたカードが何であるか知りません。このQに調べてもらいます」と言って、Qに口を近づけて、何かを話しかける真似をします。そしてQをデックの中に表を上にしてさし込んでから抜き、Qを耳に近づけて話を聞く真似をします。

「えっ、逆向きじゃ見えないですって」と言って、こんどはQを裏向きにしてデックのまん中へんに入れ、それから耳に近づけて話を聞く振りをします。「なるほど、ひっくり返っているのは〇〇の××だそうです」とクリンプしたカードの名前を言います。それからカードをスプレッドして、ひっくり返っているのがそのカードであるのを見せます。

ジョーカーズウィスパー

= ロイ・ウォルトン、雑誌 ″Pabular″、1977 年 1 月 =

これはマトリックスの原理で、4 人の客が心の中に思ったカードを、ジョーカーに教えてもらって当てるというトリックです。ですからジョーカーを使わなかったとしたら、たんなる数理トリックです。ジョーカーを使う演出によって、数理的トリックから数理の雰囲気が消えるという例です。

4x4 のマトリックストリックの原理を復習しておきましょう。4 人の客に 4 枚ずつカードを見せます。1 人目には 1、2、3、4 のカードを見せてその中から 1 枚思わせます。同様に 2 人目には 5、6、7、8 の中から思わせ、3 人目には 9、10、11、12 の中から思わせ、4 人目には 13、14、15、16 の中から思わせます。

16 枚のカードを集めてから、4 つの組に分け直しますが、1 組目は 1、5、9、13 とし、2 組目は 2、6、10、14 とし、3 組目は 3、7、11、15 とし、4 組目は 4、8、12、16 とします。

それぞれの客にどの組にその客のカードがあるかをたずねます。たとえば 1 人目の客が 3 組目にあると言ったら、その組には 4 人の客が見たカードが 1 枚ずつ入っていて、3 が 1 人目の客のおぼえたカードだとわかります。

ウォルトンはどのようにして、最初のそれぞれのパケットの組合わせを、あとの組合わせ方に変えたでしょうか。私はそのやり方があまりにも無謀だと感じたので、別の方法を思いつきました。しかもその方法を生かすには、ジョーカーを使うということが不可欠であるのです。

ということで、私はウォルトンの原案は演じることはありませんが、改案を思いつかせてくれたということで、原案も収録しておくことにいたしました。

＊方　法＊

デックからジョーカーを抜き出して、表向きにテーブルに置き、ジョーカーがあとであなたを助けてくれると説明します。

4 人の客に 4 枚ずつ渡し、混ぜさせたあと、表を見てそれらのうちの 1 枚のカードをおぼえてもらいます。

おぼえたらまたカードを混ぜてもらい、それから 1 人目の客から順にパケットを受け取り、あなたの左手に重ねていきます。4 人目の客のがトップになります。

ジョーカーを取って裏向きにトップに置きます。パケットを何回かカットして、ジョーカーがどこに行っ

たかわからなくします。そしてストラドルファローします。（訳注：パケットを 8 枚と 9 枚に分け、9 枚の方がトップとボトムになるようにファローすること）。ストラドルファローのあとまたカットして、さらにもういちどストラドルファローします。

パケットを表向きに広げて、ジョーカーを抜いてテーブルに置きますが、抜いたところからフェース側のカードをバック側のカードの下に入れてそろえます。ジョーカーを抜き出すとき、ジョーカーが状況の変化をよく見ていた、というようなことを言います。

パケットを左手に裏向きに持ち、トップの 4 枚を広げて取り、表向きにテーブルに置きます。さらに 4 枚ずつ取って、表向きの広がったパイルを 4 組作ってテーブルに並べます。

客の 1 人にジョーカーを渡し、それでその客のおぼえたカードのある組をタッチさせます。あなたはジョーカーを受け取って耳に当てます。そしてその客のカードを当てます。その客のカードは、それが x 番目の客であるとしたら、左から x 番目のカードです。同様にして、他の客のカードも、ジョーカーにたずねる演技によって当てます。

＊備　考＊

私が無謀だと言ったのは、17 枚のカードでストラドルファローをやることです。たぶんやり慣れた人にとっては、それほど難しいことではないのでしょう。しかし 60 歳を過ぎた人の老眼の進んだ目には、ファローシャフル自体が難しく、ましてや 17 枚のカードでストラドルファローをやることは至難の技です。

ジョーカーの目

= 加藤英夫、2012 年 9 月 28 日 =

ストラドルファローをやることが無謀だと思ったとき、私はすぐ ″Card Magic Library″ 第 10 巻に解説した、コンビネーションストリッパーカードのことを思い出しました。203 ページに解説されています。できれば以下の説明は、同書の 203 ページを見ながら読んでください。

そこに解説されている 4 つのタイプのカードは、上左型、上右型、下左型、下右型の 4 種類あります。

それら 4 枚をよく混ぜたあと、縦方向のストリッパーを抜いて、右手で手前に抜いた 2 枚を右に、左手に残った 2 枚を左に置きます。右の 2 枚を横方向のストリッパーで抜いて、右手のを右、左手のを左に置きます。同様に左の 2 枚も左右に抜いて置きます。

その結果、左から右に向かって、上左型、上右型、下左型、下右型と並びます。その性質をストラドルファローの代わりに使うのです。

4 人の客に渡す 4 枚のカードが、それぞれ異なる 4 つの型のカードで構成されていれば、あとで 16 枚をよくシャフルしてから、縦方向、横方向に抜いてから前述のようにテーブルに並べれば、右の組に 4 人の客の下右型のカードが集まり、右から 2 番目の組に 4 人の下左型のカードが集まり、以下同様となります。そのコンビネーションストリッパーカードの働きが、ストラドルファローでカードを組み替えるのと同じ働きとなるのです。

でもよくシャフルされたカードをそのように分けると、各組の中で 4 人の客のカードは順番になっていません。これがストラドルファローとの違いです。そこにジョーカーを使う重要な意味があるのです。ということをお話した上で、準備の説明に移ります。

＊準　備＊

上左型、上右型、下左型、下右型のカードをそれぞれ 4 枚ずつ作ります。それらを ″Card Magic Library″ 第 10 巻 203 ページの図 1 のように、それぞれの 4 枚を左から上左型、上右型、下左型、下右型の順でテーブルに置きます。

左の組から 1 枚取って左手に置き、つぎに左から 2 番目の組から 1 枚取って左手のカードの上にのせ、つぎに左から 3 番目の組から 1 枚取って左手のカードの上にのせ、左から 4 番目の組から 1 枚取って左手のカードの上にのせます。また左端に戻って、そのように 1 枚ずつ取って重ねていくことをすべてのカードが集まるまで行います。

カード大の紙片に、右図のような情報を記入します。上記のように集めたカードのトップからのカードの名前を、図の〇印ではない数の順番に書くことになります。名前は、7S のように数とマークの頭文字で書きます。

①	4	3	2	1
②	8	7	6	5
③	12	11	10	9
④	16	15	14	13

＊方　法＊

ジョーカーを見せて、あとであなたを助けてくれるというようなことを言います。裏面を見せないようにテーブルに置きます。

16 枚のカードを取り出して、上から 4 枚ずつ分けて取り、テーブルの右から左に置きます。

右端の 4 枚を取り、それらをファンに広げて表を 1 人目の客に向け、「この中のにどれか 1 枚をじっと見つめ、そのカードをしっかりおぼえてください」と言います。

客がファンを見つめたら、ジョーカーを取って、図 1 のようにジョーカー面を客の方に向け、「あなたがどのカードを見つめているか、ジョーカーが観察します」と言います。

ジョーカーを表の面を下にしてテーブルに置きます。4 枚のカードを閉じて、最初と向きを変えないように、裏向きにテーブルに置きます。

右から 2 番目の 4 枚を取り、同じことを 2 人目の客に対して行います。3 番目と 4 番目の客に対しても、3 番目、4 番目のパケットで同じように行います。

それからパケットを集め、よくシャフルします。客にシャフルさせてもかまいませんが、落とされる可能性を考えたら、自分でシャフルするだけの方がよいと思います。シャフルさせることに重要性はありません。

ここで "Card Magic Library" 第 10 巻、204 ページに解説されている、'アセンディングオーダー' に解説されているのと同じやり方で、16 枚のカードを 4 枚ずつ 4 組に分けます。

「もういちど皆さんにカードを見つめていただいて、ジョーカーに確認させます」と説明して、右から 1 組目を取って、ファンにして左手に持ち、1 人目の客に見せます。その中に 1 人目の客のカードがあるかどうかたずねます。

1 組目に 1 人目のカードが「ある」と言ったとしたら、右手でジョーカーを持ち、まえと同じように図 2 のようにジョーカーをその客の方に向けます。図 1 のカードの①の行にあるカードのうち、右端に書かれているのが 1 人目の客が思ったカードです。ジョーカーを耳に当てて、ささやきを聞く演技をして、「あなたのカードは〇〇の××ですね」と当てます。

その組に他の客のカードもある可能性もありますから、その組をそれぞれの客に見せて、思ったカードがあるかどうかをたずねます。客が「ある」と言った場合には、その客にカードを見つめさせて、ジョーカーをその客に向けます。

1 組目の中に 3 人目の客のカードがあると言ったら、図 1 の上から 3 行目、③の行のいちばん右端のカードがその客のカードですから、それを当てます。以下 4 人の客のカードを当てるまで、4 つのパケットを順番に見せていき、同様に行います。

それぞれの客のカードの判定方法はつぎの通りです。

あるパケットを見せたとき、その客が「ある」と言った場合には、その客が y 番目の客で、いま見せているパケットが右から x 番目であるとしたら、表の上から y 番目の行の右から x 番目のカードがその客のカードです。

＊備　考＊

ジョーカーにたずねる演技をして、そのときにその客のカードを言って当ててもよいですが、つぎのように演じてもかまいません。ジョーカーにたずねたら、4 枚の表を見て客のカードの位置を確認し、裏向きに戻し、その客のカードを抜いて、裏向きにその客の前に置きます。そのようにして 4 人のカードを抜き出したあと、それぞれの客のカードを名乗らせてから、そのカードを表向きにします。サイキックに演ずるか、ビジュアルに演ずるかの違いです。

ウィスパラーズ

= ジェリー・サトウィッツ、″アルタネイティヴカードマジック″、1982 年 =

＊方　法＊

1．デックから 4 枚のJを抜き出して、表向きに赤黒交互に置きます。それら 3 枚を抜き出すとき、トップ 3 枚のカードを記憶します。

2．リフルフォースを使って、トップ 3 枚を 1 人の客にフォースして、表を見せず、裏向きにその客の前に並べます。

3．1 枚目の選ばれたカードを取り、裏向きのまま 4 枚のJの下にすべり込ませ、そして全体を取り上げます。「4 枚のJに選ばれたカードをよく見せて、それからJに選ばれたカードを教えてもらいます」と言います。そのように言いながら、5 枚のカードをエルムズレイカウントで 4 枚にカウントします。そのカウントでは、選ばれたカードの裏面が見えますが、Jは 3 枚しか見えません。しかも同じJが 2 回見えます。その矛盾は、客が裏向きのカードに注目しているので気づかれることはありません。

4．パケットを耳の近くに運び、ささやきを聞く演技をしてから、選ばれたカードを当てると言って、フォースしたカードの名前を告げます。それが正しいことを見せるために、パケットを裏返し、つぎのように広げます。

トップの 1 枚を押し出し、つぎはボトムの 2 枚をダブルバックルして 2 枚を押し出し、つぎは表向きの選ばれたカードを押し出し、そして最後のJを取ります。

表向きのカードの上で分けて、右手のカードで表向きのカードを裏返します。裏返ったとき、ダブルで重なっているうちの下のカードを左手の 2 枚の上に落とします。そしてそのカードをいかにも

選ばれたカードのごとく、テーブルに置きます。右手のカードを左手のカードの上にのせてそろえ、さり気なくトップカードをボトムにまわします。それからパケットを表向きにします。

5. ステップ3と4を繰り返します。すなわち、2 枚目の選ばれたカードを裏向きにJの下に入れ、エルムズレイカウントし、ささやきを聞いて選ばれたカードの名前を言い、そして選ばれたカードをすり替えて、テーブルに置いた 1 枚目の上にのせます。

6. 3 枚目の選ばれたカードで同じことを繰り返します。こんどは最後にトップカードをボトムにまわすことはしません。

7. 以上の結果、観客はテーブル上の 3 枚が選ばれたカードだと思っています。実際はそれらは 3 枚のJで、3 枚の選ばれたカードは左手にあり、いちばん下に 1 枚のJがあります。

8. 手元の 4 枚を広げながら、「4 枚のJが 3 枚のカードを当ててくれました」と言います。そしてそれらをそろえるとき、ボトムカードを右手にスチールします。

9. 「Jはとても不思議なカードなので、神出鬼没です」と言って、右手でテーブル上のカードをつかみ、パームしている 1 枚を加えて表向きに広げ、4 枚のJを現します。そして手元の 3 枚を表向きに広げて、選ばれたカードになっているのを見せます。

＊備　考＊

ダブルバックルをやる部分は、つぎのようにやった方がよいと思います。

エルムズレイカウントしたときに裏向きのカードの下にブレークを作り、ブレークを保ちながらパケットをひっくり返し、ブレークを利用して 1 枚目を右手に取ったあと、ブレーク上の 2 枚を取ります。

ステージシャウト

= ロイ・ウォルトン、″コンプリートウォルトン第 2 巻″、1988 年 =

この作品についてロイ・ウォルトンは、前述のサドウィッツの’ウィスパラーズ’に影響を受けて考案したと述べています。

＊方　法＊

デックの中から 3 枚のQを抜き出して表向きに置きますが、フェースから赤、黒、黒とします。フェースからダイヤ、スペード、クラブと置いたとします。

デックをリボンスプレッドして、2 人の客に 1 枚ずつ抜いて、見ておぼえ、自分の前に裏向きに置

いてもらいます。

客がそうしている間に、3 枚の表向きのQを取り上げて、密かにいちばん下のQを裏向きにリバースします。

手に持っている 3 枚を、裏向きのカードが露見しないぐらいほんの少し広げて、1 人目のカードを取り、3 枚の上から 2 枚目のQの下に入れてアップジョグさせた状態で、「選ばれたカードをQたちによく見せます」と言います。

アップジョグカードを押し込み、エルムズレイカウントを行いますが、裏向きのカードはアップジョグさせて取ります。「これでこのカードが何であるか、Qたちにわかりました」と言って、アップジョグカードを抜いて 1 人目の客の前に置きます。

3 枚を右手のビドルグリップに持ち、そのパケットを右耳の近くに運びますが、そのときボトムにある選ばれたカードの表がこちらを向くように運べば、そのカードをグリンプスすることができます。

「Qたちは〇〇の××だと言っていますが、当たりましたか」と 1 人目の客にたずねます。客は肯定します。

2 人目の客のカードでまったく同じことをやって、その客のカードを当てます。

現在、テーブルの左にクラブのQ、右に 1 人目のカード（2 人目のカードと思われている）、そして手元の 3 枚のいちばん下が、裏向きになっている 2 人目のカードです。

「じつはこれらのQはカードを教えてくれるだけではなく、不思議なパワーを持っているのです。それをお見せしましょう」と言って、テーブルの右のカードを取り上げて、「この〇〇の××をこちらのカードの中に入れます」と 2 人目のカードの名前を言って取り上げ、それを右手でデックのトップに置いて、テーブル上でデックをカットします。

手に持っているカードをデックの上でぐるぐるまわします。そしてエルムズレイカウントして、裏向きのカードをアップジョグします。それを抜いて表向きにして、2 人目のカードであるのを見せます。

「このカードは〇〇の××です」と、左のカードを指さしながら 1 人目のカードの名前を言います。手元のカードを裏向きにして、そのカードの上にのせ、3 枚全体を取り上げます。ここでエルムズレイカウントのやり方で 3 枚を 4 枚にカウントしてもかまいませんが、私はそれほど重要だとは思いません。

そして 3 枚を表向きにして、テーブルにばらばらに分散させて置き、1 人目のカードが消えたことを見せます。

＊備　考＊

パケットを右耳の近くに運びながら、グリンプスすると書いてありますが、このグリンプスのやり方は注意が必要です。パケットを運ぶ途中で視線をパケットの方に向けると、視線をそこに向けたことが観客の方からはっきりとわかります。

グリンプスというものは、ある動作の陰でやるものですが、視線を向けるのはその動作の途中でやるのではなく、その動作の初めでやるものです。

すなわち、右手がパケットをつかみにいくとき、同時に視線をパケットの方に向けます。つかむために視線をそちらに向けるのはおかしくありません。そして視線を左手の方に向けたまま、右手でつかんだパケットを右上に運べば、自然にボトムカードが視界に入り、グリンプスすることができます。

3 枚をほんの少し広げて、選ばれたカードを上から 3 枚目に入れると書かれていますが、そのような広げ方をすること自体が胡散臭いですから、私はつぎのようにやります。

左親指の先をパケットの左上コーナーに当て、裏面が露見しない範囲でダブルプッシュオフをやります。そして右上コーナーでずれた部分で、選ばれたカードを 3 枚目に入れます。かなりずらしても、1cm ぐらいずらしても、裏面は露見しません。

ウォルトンはこの作品がサドウィッツ作品に影響されて考案した、と述べていますが、影響を受けた別作品というよりも、バリエーションと称するのが適切であるような気がします。

雑誌 " ジニー "、1998 年 8 月号には、ゴードン・ビーンが ' プレイレディース ' というトリックを書いていますが、これはウォルトンバージョンのうち、2 枚のカードを当てたところで、そのあとの飛行および消失現象をやらないものです。当てるハンドリングはウォルトンのやり方そのものです。にもかかわらず、ビーンはつぎのように書いています。

"The following is an outgrowth of the Walton routine". (つぎのトリックは、ウォルトンの手順からの副産物です)。

このようなクレジットは、正当なものとは感じられません。むしろ類似作品、悪く言えば盗作を正当化する手段というように、私には感じられてしまうのです。むしろビーンはウォルトン作品をそのまま紹介し、飛行および消失現象をやらない見せ方もあると書けば、それはそれで意味のあることになると思います。

魔女のささやき

= 加藤英夫、1999 年 2 月 28 日 =

＊方　法＊

最初にカットのやり方を教えておきます。相手にシャフルさせたデックを受け取り、「魔女というと、なんとなく悪人のイメージがありますが、けしてそうではありません。’奥様は魔女’という明るいドラマもありましたよね。今日は魔女の力を借りて、不思議なことをお見せします。一組のカードの中で魔女といえばスペードのQです」と言って、表を自分に向けて広げていき、スペードのQがトップから 2 枚目にくるようにカットします。そのときトップカードをグリンプスして、キーカードとします。

デックを裏向きに持ち、ダブルリフトでスペードのQを見せ、裏向に戻し、「スペードのQをこちらに置いておきます」と言って、上の1枚をテーブル上のケースの上に置きます。ケースの上に置くのは、あとで相手がそのカードを取り上げるとき、テーブルから直接では取りにくくて、表を思いがけずに見てしまう可能性があるからです。

「心の中で 5 から 15 の間の数を選んでください。そして、その数だけカードを1枚ずつテーブルに置いていってください。大きな音をたててやると、枚数がわかってしまいますので、静かに置いてください。その枚数を置き終えたら、教えてください」と指示します。

相手が置き終えたら、「それでは手に持っているカードのいちばん上のカードをのぞいておぼえてください。そうしたら、テーブルに置いたカードを取り上げて、手元のカードの上に重ねてください。それらの上にケースの上に置いてある、スペードのQを裏向きのまま、手元のカードの上にのせましょう。最後にカードをカットしてください」と指示します。このセリフは、そのまま続けてしゃべるのではなく、相手の動作に合せてしゃべります。

前に向き直り、カードを取り上げます。「あなたは選んだ数の分だけカードを置いて、つぎのカードをおぼえました。テーブルに置いたカードをその上にのせ、その上にスペードのQをのせました。スペードのQにきけば、あなたのやったことがすべてわかります」と言って、トップから表向きにディールしていき、キーカードが置かれたら、つぎからカウントしていきます。スペードのQが出てきたら、そこで手を止めます。そのときのカウントがXだとします。相手がX枚置いたことになります。

体を傾けて右耳をテーブル上のカードに近づけて、「スペードのQに枚数をききます。なるほどあなたはX枚のカードを置きましたね」と当てます。それからトップから順番が変わらないようにX枚を押し出し、図1のように右手を返してそれらをつかみます。

右手を起こしてカードを垂直にして、「このX枚をあなたは置きました」と言いつつ、図 2 のようにいちばんバックにあるカードを左に少しプッシュしてグリンプスします。それは相手がおぼえたカードです。

「ですから」と言いつつ、右手のカードを図 1 の状態に戻し、図 3 のように右手をかけ直し、

「これらをどければ」と言って、それらのカードを右に引いて取りつつ、いちばん上のカードを左親指でデックのトップに引いて取ります。このとき左手を少しビベルさせます。右手のカードを表向きにしてテーブルのカードの上にのせます。

「ここにあなたのおぼえたカードがあるはずです」と言って、デックのトップカードを指さします。ふたたびテーブルのカードに耳を近づけます。「おぼえたカードをスペードのQにききます。〇〇の××ですね」とグリンプスしたカードの名前を言い、デックのトップカードを表向きにします。

＊備　考＊

セリフが多いですが、とても不思議さの強いマジックですから、ぜひあなたに合ったセリフをまとめて実演してみてください。

なおダブルリフトして見せたカードをキーカードとして使うのは、ピーター・ダフィの〝エフォートレスカードマジック〟(1997 年) の中の ’ マインドリーダーズウィズダム ’ の中で使われているのを読み、それをもとにしてこのマジックを考案しました。しかし現象はまったく別のものであり、キーカードの使い方だけの借用です。

おしゃべりクィーンの透視術

= 加藤英夫、2001 年 8 月 10 日 =

これは、"Card Magic Library" 第 5 巻、184 ページに解説された ' ノーサイン ' の現象を、マークカードを使わずに行う方法です。マークカードを使わずに同じ現象を実現できるなら、マークカードを使う方法の存在価値がないのでは、と思えるかもしれませんが、一長一短がありますので、状況によって使い分けてください。

＊準　備＊

つぎのリストを作り、1枚のカードの表面に貼ります。このカードを胸ポケットに入れておきます。

2	6 J 3
3	7 8 K
4	6 9 5
5	7 10 6
6	6 J 7
7	7 8 4
9	6 9 A
10	2 10 7

＊方　法＊

シャフルされたデックから、「ハートのAからKまでの 13 枚を使います」と言って、13 枚のハートを抜き出して、トップから A、2、3、、K とします。そのあとQがトップから 5 枚目にいくようにカットします。

1 人目の客に 13 枚を渡して、あなたは後向きになります。そして ' ノーサイン ' とまったく同じやり方で、1 枚のカードを選ばせます。すなわち、パケットを左右交互にディールさせ、一方の山を取り上げて、そのトップカードを取らせるということです。

取ったカードをポケットに隠させ、テーブルのパケットを手元のパケットの上に重ねさせ、カードを 2 人目の客に渡してもらいます。2 人目と 3 人目の客に同様にやらせます。

3 人目の客がテーブルのパケットを手元のパケットに重ねたあと、背後でその客の方に手を伸ばし、「上から 1 枚ずつ表向きに置いてください。Qが出たらストップしてください」と言います。そのとき、右手は密かにポケットからリストカードを取り出し、リストが書かれている面を下に向けます。

相手がストップしたら、その枚数目を記憶します。そして左手を自分の前に持ってきて、すぐに右

手のリストカードをボトムに加えます。そして前に向き直ります。

Qの表が観客の方に向くように持ち、すぐに認知した数をリストの左の縦の列から見つけ、その数の左に並んでいる 3 つの数を記憶します。その 3 つの数の左が 1 人目のカード、中央が 2 人目のカード、右が 3 人目のカードを示しています。

Qのささやきを聞く演技をして、3 人のカードを当てます。

サイキッククイーン

= 加藤英夫、考案日不明 =

この作品は、サイモン・アロンソンの ″トライジインポシブル ″(2001 年) に解説されている、’ プライアコミットメント ’ という作品に使われている、’ アンドゥーインフルエンス ’ の原理を利用して、’ ウィスパリングクイーン ’ の作品としてまとめたものです。

＊方　法＊

相手にシャフルさせたデックを受け取り、表を自分に向けて広げていき、「不思議なパワーを持ったカードを探します」と言って、サイレントカウントしていき、フェースから 26 枚目をキーカードとして記憶します。そのあとに出てくるQを抜き出して、テーブルに表向きに置きます。スペードのQだとします。

「スペードのQがあとで私を手伝ってくれます」と言って、スペードのQをデックのトップに置き、何回かカットしますが、結果的にそのQがトップに戻るようなやり方をします。

相手の前にデックを置き、「適当なところからこのようにカットしていただきますが、半分より少なくカットしてください」と言って、カットさせます。そしてカットしたパケットのボトムカードをのぞいておぼえさせます。

「残りのカードのだいたい半分を持ち上げてください」と言って、左手でカットして持ち上げさせます。キーカードより下でカットされる必要があります。

そうしたら、テーブルに残っているカードの上に右手のパケットを重ねさせ、その上に左手のパケットを重ねさせます。

相手にデックを取り上げさせます。「あなたのカードが何枚目にあるか、誰もわかりません。でもスペードのQなら知っているかも知れません。上から 1 枚ずつ表向きに置いていってください。そしてスペードのQが出たらストップしてください」と説明して、スペードのQが出てくるまで表向きにディールさせます。そのとき、あなたはキーカードが何枚目に出てくるかを数えます。

キーカードが X 枚目に出たとします。26-X の計算をします。答が Y であるとします。

スペードのQで相手がディールをストップしたら、スペードのQを受け取り、それを耳に当てて、「あなたがおぼえたカードは〇〇枚目にあると言っています」と、先ほどの計算結果の Y 枚目を言います。

「それでは 1 枚手前の〇〇枚を置いてください」と Y-1 枚をディールさせます。そして相手のカードを名乗らせてから、つぎのカードを表向きにさせます。相手のカードです。

加藤英夫のホームページ

http://www.magicplaza.gn.to/

Card Magic Magazine 第 21 号

発　行　2014 年 1 月 3 日
著　者　加藤英夫
発行者　加藤英夫
hae16220@ams.odn.ne.jp